

【活先生のジンバブエ回想記】

「これ有る故に彼有り これ起る故に彼起り

これ無き故に彼無く これ滅する故に彼滅す」

『雑阿含経』に仏教の中心思想である「縁起」について、右のように説かれている。全てのものは、縁によつて起る。それ単一に存在するものはない。

今ここにいる私も、今ここに突然現れたのではなく、様々な縁が重なつて、今ここにいるのである。両親の子供としてこの世に生まれてきた縁、お寺の息子として生まれてきた縁、お世話になつた先生方と出会つた縁、たくさんの方々と出会つたそれぞれの縁、数え切れないほどの縁が重なつて今私はここにいます。そのたくさんの縁のうち、一つでもなかつたら、私は、今、ここにいないのかもしれない。振り返つてみると、過去に起つたことが、今ここにいる私の縁となつていふということに、気づくこともあるが、それは、今だから言えることである。また、同様に、今の私が、未来の私のどのような縁になつていふのかは、今は、何もわからない。「縁」とは、本当に不思議なものである。

私が、故郷長崎から遠くはなれた、アメリカのローダイに来ることになつた一つの縁は、こられた、遠く離れたアフリカのジンバブエへボランティアとして行つたことである。しかも、それは、僧侶としていつた訳ではなく、野球コーチとしていつたのである。当時、私は、宮崎大学教育学部の学生であつた。お寺の息子であることも嫌であつた。そのため、実家のお寺から離れたいと思ひ、地元から離れた大学へ進学した。実家のお寺から離れたいと思ひは、更に強まり、ついに、アフリカ、ジンバブエまで行つてしまつたのである。ジンバブエでは、小学生、高校生また、ナショナルチームの選手に野球を教えた。ジンバブエでの二年四ヶ月は本当に充実してゐた。日本へ帰国後も、その充実した生活が忘れられず、私は、海外での仕事を探した。その行き着いた先が、ローダイ仏教会である。本当に不思議なものである。

今思えば、今から十三年前、ジンバブエへ行つたことが、今の私の大きな縁になつていふように思ふ。当時何があつたのか、僧侶となつた今の私からの視点も交えながら、当時のことを振り返つていきたいと思います。〈次号へ続く〉 合掌 楠 活也